



2008年

SORA 21号

晴夜 (21) | 2

柴田 佐知子

友がゐて少年楽し冬紅葉

寒鯉のまはりの水の交はらず

声たててよろこんでゐる耳袋

岩山に岩の仏や春立ちぬ

初蝶の墓域を低く流れゆく

長崎は家の灯重ね春の月

猫の子の一かたまりのみな眠る

怒る眼も混じつてゐたる涅槃絵図

武蔵野

中田みなみ

吉良の忌と言ふがありけり都鳥

社会鍋聖歌に馴れし鳩の寄り

旧道を歩きながらに年移る

初明り贈る小筥が卓にあり

革椅子のくるりと廻りお年玉

淑気かな剣道場に柱なく

・籤運・

私は運勢、方位、ご先祖様の罰など全く信じない。町内での福引券もどうせ懐紙がせいぜいと受け取らないのに、書き損じの葉書を利用してひよんなことから駒が出たことがある。

三十年程前のある日、友人宛の葉書に「ご無沙汰しております。その後…」まで書いた時、玄関のベルが鳴り、其処にご本人が立つておられた。

数日後、当時確か二十円？だったその葉書を捨てあぐねつつふと新聞を見ると「第二回東京都墓地申込受付中、抽選〇月〇日」とある。いたずら半分に書き出しの文を線で消し投函した。ところが忘れていた頃当選の通知がきたのである。

生垣の路地蘇る羽子の音

コーヒーを沸かし初荷を迎へけり

パンの耳届く四日の動物園

小金井公園移築古民家・五句

武蔵野の落葉くぐりし湧き清水

炉火赫し日向の庭に雀鳴き

囲炉裏火にひき込まれゆく眠さあり

園丁は

一しきり舞ふ葉眺めて掃き始む

番傘の竹骨太し寒の入り

鐘冴ゆる鴉の下りし地の固き

下町に菩提寺があったので放つたらかして置くと、更に半年以内に建立しないと当選取消しとの文書が来たので、墓地の見学旁ピクニック気分ですでかけてみた。

桜並木に囲まれた芝生には噴水が音を立て、寝暮めいた同型の低い墓がずらりと並んでいる。何よりも気に入ったのは、薄霞の多摩丘陵であった。即決心し帰途墓石屋に立ち寄り相談してみた。

この抽選に当たるのは稀な幸運の人だと煽られ、菩提寺の方はそのままにして、先祖の墓土をビニール袋に入れ、新墓の納骨場所に納めておけば良いのだと言う。

やがてスエーデン産のグレイの石にした此の墓は二十七年間泥んこ入りのビニール袋をお守りにしてきたが、やっと三年前、嫡子のない義弟の骨を納めることが出来た。清々しい高尾の木の芽風に心なしか墓石が艶めいて見えた。

方
冊

荒井千佐代

肥前の雲肥後へ流るる枇杷の花

冬耕の胸の十字架ときに見ゆ

兎罫かけ一服の長かりし

鳩舎よりときをり羽音聖夜餐

巻貝に砂のぎつしりクリスマス

国旗ほつれて歳晩の離島便

昨年末、息子が結婚した。その事を少々。式は国宝の大浦天主堂で、披露宴はその近くのベイサイドにある会場で。前日降った雨も嘘のように上がり、又、列席の方々のお陰で、それはそれは心温まる式と披露宴だったのだが、ここでは特に、夫と私の趣向である音楽に関することを書きたいと思う。

挙式の時、私の所属する教会（長崎市の最北部にある）の聖歌隊の方々が、南部迄の遠路を馳せ参じて下さり、美しいハーモニーで祝福してくれた。巧いと定評のある聖歌隊のレデンプトリスチン（コリント前書13の1―8）の「愛の賛歌」は、もうすぐ世界遺産になるかもしれない荘厳な堂内に、そして私共の心の奥に沁み込んだ。始式までのオルガン演奏も偶然参加の観光客への聖なる刻への導入となったであろう。

披露宴には、知人のいる弦楽四重奏をお願いした。迎賓、乾杯後、歓談、送賓のときと、

柚子の家と呼ばれてをりぬ亡父の家

ちち描きし軸に初日や海光も

あけぼの色して初漁の船戻る

日を洩らす浦上の雲鳥総松

寒怒濤ロザリオ入れし旅鞆

タンカーが港の真中ぼたん雪

夫の父母われの父母無し実南天

十字架のイエスが踏絵ふめといふ

彼の冬木世紀末には方舟に

四回の演奏。会場に入るや否や、同じテープルの甥が「凄いーやっぱり余所とは違う。生演奏付きだ」と、驚きの一声。私が「そうではなくて、私がお願ひしたのよ」と。余興は唯一、息子と同年度の野球部の後輩達による寸劇「荒井診療所」のみ。無芸な家族や親族にとつて、この室内楽はとても助かった。和やかな雰囲気作りに最適であった。迎賓の時の「カノン」「アイネ・クライネ・ナハト・ムジーク」、祝奏の「愛の賛歌」他、「アヴェ・ヴェルム・コルプス」「G戦上のマリア」送賓の時の、モーツアルトの「デイベルティメント」等、全てすばらしい演奏だった。インターネットでも調べられるし、私共のように特技のない者にとつては打って付け。皆様にもお勧めです。

新婚の二人は、工作上離れ離れに暮らしている。大切な人命に関らせて戴いている日々
の二人。理解し合い、協力し合つて、いい人生を歩んで欲しいと祈っている。

斜交ひ

服部 早苗

深草の君かもみのこづちつけて

水たまりあればかけよる銀杏の実

産み月の万の穂草のなびきけり

枯深みをり草占の草のなほ

檻樓市の煙管に隣る肥後守

すぐ横に誰も居らざる帰り花

赤ん坊の眠りひたすら花八手

襤褸干す紙漉場とも家居とも

いつときは海に日のさす室の花

冬うらら乗馬マシンにある手綱

駅中にカフェラテの渦年の暮

反芻のことばがひとつ石路の花

乳飲み子の淡き衣のいろ初御空

初雪や冷凍母乳湯せんして

斜交ひにおとといもうと浮寝鳥

一月十三日、孫の宮参りをした。まだ正月
気分の残る産土の神社は遅い初詣らしい人々
で混んでいる。この日はよく晴れて風が冷た
く、神殿のままで風が通った。神妙な気持と
重なり、付き添いの大人たちは体が震えたが、
赤子はあたたかい母親の腕の中でずっと眠っ
ていた。

産土の神様の前でどこそこの誰々、と名前
を読み上げられ、そして深々と頭を下げる、
こうして無事にこの土地の神様に認められ、
住人になったと感じられるのも不思議な思い
である。

胡蝶蘭

あさなが捷

母を看に通へる街はクリスマス
 白菊を一輪持ちて葬儀社来る
 むくろとなりし母に胡蝶蘭飾る
 慈母であり猛母でありしあらせいとう
 一步でて夫を忘れし雪をんな
 猫の四肢伸びきつてゐる春隣
 千年の黄泉より雛の戻りたる
 ふらここを漕ぎて些事にはこだはらず
 沈丁花風といつしよについでくる
 夕闇のせまるひとりの石鹼玉

・本人証明・

忘れもしない昨年十一月の第一金曜日、
 飲酒運転一斉取り締まりに遭い免許証不携
 帯で反則金三千円を納めるハメになりました。
 た。

まず住所・氏名、本籍地を聞かれ、その
 人が免許を取得しているかを確認すること
 から始まり、ここにいる私が本人であると
 証明されなくてはなりません。電話で夫に
 事情を話して妻であると証明してもらい、
 やつと解放されました。家に戻りどのよう
 に話したかを質すと、「マルポチャタイプ」
 と答えたとのこと。ひどい。結婚後少し？
 は肥ったけれど、美人ですと言っても、こ
 の人はそう思ってるんだなあと警察官は納
 得してくれたはず。友達に話すと盗難車の
 場合も考えられたりするし、すぐ分かって
 もらえてよかつたとの意見。承服出来ない
 私は子供たちにも訴えたのです。爆笑され
 ただけ。更に娘はこのことをネタにして、
 みんなに話すと大うけしたとまでいうので
 す。

亡くなった母の語録を持ち出しては姉達
 と可笑しかったねと話すのですが、この「マ
 ルポチャタイプ」の話は私がいなくなつた
 後、子供達の会話に何度も出てくることにな
 るのでしょうか。

耳袋

小林 朱 夏

雪降ればつもれつもれと囃すなり
すべり台色とりどりの耳袋

冬夕焼ひとりで置いていかれさう

土筆野や影どこまでも付いてくる

寒鯉の時をり背鰭見せるのみ

露の臺太陽丸ごと飲み込んで

白鳥のみにくく鳴いて恋をせり

御開帳長き炎が傷映す

ウオーキングの一人の行進山笑ふ

花筏向きを変へては動きだす

・赤手拭・

私が育った福岡市東区の箱崎地区では、江戸時代より還暦を迎えた人が正月、宮崎宮に会してご祈祷をうけ、お祝いする習わしが百数十年続いている。

同年の会より、案内があり、今年は昭和二十三・四年生まれの私達が会した。世話人が用意してくれた祝還暦・子丑会・平成二十年一月吉日と白で染め抜かれた赤手拭を首から下げた百二十余名が冷たい雨の中、押し競饅頭よろしく、体を寄せ合い、宮崎宮の絵馬堂にて記念撮影。その後、祝賀会場へ。幼馴染の宴は、権威のひけらかしも、損得勘定も無用である。各人が自分で自分にスポットライトを当て、思い出に酔っていく。そして博多祝い唄・博多手一本の手締めで宴は終わった。

中学生の頃から、自己の確立に悩み、切れ味の鈍い、見えないナイフで無意識に自己を傷付けている私があった。そして今、そのナイフがいつの頃からか、消えていたことに気付いた還暦の私がいる。